

# 新生児、周産期、救急

産科や新生児科のスタッフが慢性的に不足する中、経験の少ない若い医師や看護師、助産師らに基礎的なトレーニンングを積んでもらおうと、名古屋市立大病院（同市瑞穂区）が今年開設した「臨床シミュレーションセンター」が好評を得ている。高機能の模擬人形を用いて実践に近い形で訓練し、スタッフの自信やチーム医療の推進につなげようとの狙いだ。（加藤美喜）

## 名市大病院の研修施設



# 模擬装置で“現場”体験

「マスクは赤ちゃんのあごから外さないで。目にもかかったらダメです」。十月下旬、若手看護師を対象にした新生児蘇生法（NCP）の講習会。講師役のベテラン助産師が、新生児の人工呼吸に用いるマスクの注意点を説明した。呼吸マスクが目にかかるで眼

## 医師、看護師ら

人形だ。一基百数十万円の米國製新生児シミュレーターは、呼吸困難や呼吸などの状況に手看護師を対象にした新生児蘇生法（NCP）の講習会。講師役のベテラン助産師が、新生児の人工呼吸に用いるマスクの注意点を説明した。呼吸マスクが目にかかるで眼



「マミー」を言われて、赤ちゃんの胎動や体温などを疑似体験する男性受講者

シムを身に着ける妊婦体験はしなごがあるが、おなかや徐々「臨床ではなかなか経験できないような状況を多職種でチームでシミュレーターで訓練する」ことで、自分の役割や相手の立場が把握でき、チーム医療の推進につながる」と話す。センターは今後、外部の研修プログラムを受け入れや、他の大学病院・中核病院と連携した研修も積極的に企画する予定で、地域医療の底上げを旨としたい考えだ。

# リアルに対応学ば

備の充実度に加え、他施設のスタッフを受け入れるシミュレーション施設は全国唯一という。変わった講習会としては、非妊婦を対象にした「妊婦体験」も。十一月下旬には、神奈川県小田の小坂崇之助教が開発した最新の妊婦シミュレーター「マミー」が、周産期医療研修の一環として東海地方で初めて紹介された。

「マミー」は、たぐさんの風船やセンサー、バイタルターなどか準備されており、羊水と同じ温度の水を注入して腹部を膨らませる。胎児の体温や成長過程、おなかを蹴る感触まで体験でき、特に男性に妊婦の大変さを知ってもらおうと開発したという。

セクターは、愛知県の地域医療再生計画に基づき三月に開設。国が都道府県に配分した地域医療再生基金から約二億円を充てた。広さは約四百平方メートルで、利用者は県内全域（一部県外も）の医療従事者が対象。妊婦のシミュレーターもあり、新生児分野だけでなく、周産期、救急の研修に活用している。設置

# 他施設スタッフも受け入れ

整形外科医（四）は「重いシナ

シムを身に着ける妊婦体験はしなごがあるが、おなかや徐々「臨床ではなかなか経験できないような状況を多職種でチームでシミュレーターで訓練する」ことで、自分の役割や相手の立場が把握でき、チーム医療の推進につながる」と話す。センターは今後、外部の研修プログラムを受け入れや、他の大学病院・中核病院と連携した研修も積極的に企画する予定で、地域医療の底上げを旨としたい考えだ。